

1 調査の概要

遺 跡 名	国史跡仙台北城跡	所 在 地	仙台市青葉区川内地内
調査原因	国庫補助による遺構確認調査	調査面積	約 85 m ²
調査主体	仙台市教育委員会（担当：文化財課）	調査期間	令和7年6月～12月

大手門跡および周辺での発掘調査は令和5年度から始まり、今年が3年目にあたります。調査では大手門の将来的な復元に向け、柱などの痕跡を探すことで門の位置を確認するほか、大手門周辺の様子も含めて把握することを目指します。今年度は令和6年度に調査を行なった地点に隣接する大手門脇櫓南東部（1区）で調査を行いました。また、絵図等で確認される大手門背面の水路（堀）跡が推定される地点（2区）で調査を実施しました。

2 大手門について

大手門の創建年代については、本丸造営時に建造したとする慶長期造営説、二の丸を造営した頃に、その大手門として建造されたとする寛永期造営説など諸説ありますが、江戸時代を通じて仙台北城の正門として存続していました。

建物構造は木造2階建入母屋造り、瓦葺であり、規模は1階が桁行約65尺（約19.7m）、梁間約22.3尺（約6.8m）、高さ約12.5mあり、全国的に見ても大規模な門です。

昭和6（1931）年には、大手門と大手門脇櫓が国宝に指定されましたが、昭和20（1945）年7月の仙台北空襲によりどちらも焼失しました。焼失後は、米軍キャンプの設置などにより周囲で大きく造成が行われて現在の状況になっています。

これまでの発掘調査では、大手門の柱の痕跡（礎石跡）や大手門・大手門脇櫓の周囲を巡っていた雨落ち溝（石組側溝：明治23年大手門修復時に設置）が確認されています。柱の痕跡は大手門の南辺のもので、南西隅の柱を含む4箇所を確認されたことで、大手門の位置を絞り込むための重要な情報が得られました。また、現在の再建された大手門脇櫓の周囲では雨落ち溝が確認され、屈曲しながら周囲を巡っている様子が確認され、焼失前の脇櫓の建物の形を考える上で重要な成果が得られています。



図2 柱の痕跡（礎石跡）の検出状況（北東から）



図1 焼失前の大手門の様子：
大手門東面（正面）
『仙台北城』（仙台市教育委員会 1967）

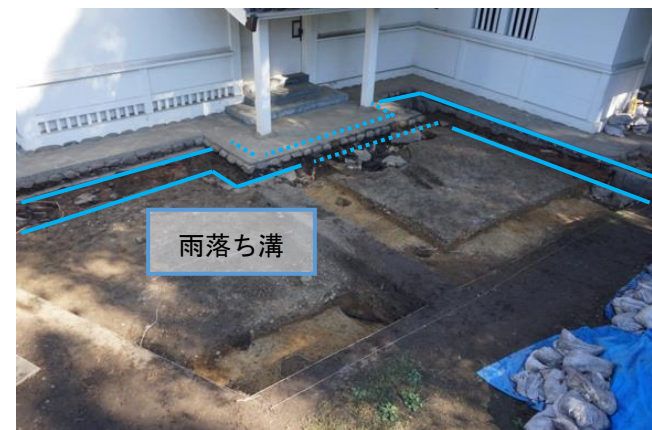


図3 雨落ち溝（石組側溝）の検出状況（南西から）

3 大手門脇櫓南東部の調査（1区）

○雨落ち溝（石組側溝）

- 令和5年、6年度調査で検出された雨落ち溝の延長部分を確認しました。
- 崖側（東側）の入り口付近で、南北から東西に屈曲する部分を確認され、溝の末端は脇櫓南東部の崖の上段近くで閉鎖されていることが確認されました。
- 屈曲部より東側は、側溝の石組が2段から1段となります。さらに屈曲部の南面には石組に接続する土管が検出され、この土管を通して排水されていたと考えられます。この土管の口は粘土で塞がれており、大手門が焼失する前には、既にこの土管は使われなくなっていたと考えられます。
- 雨落ち溝が、脇櫓（再建）の犬走（壁下の石敷状の部分）の下に溝が入り込んでいることから、焼失した脇櫓は現在の脇櫓の建物の方向とやや異なることが確認されました。



図4 遺構検出状況（北から）

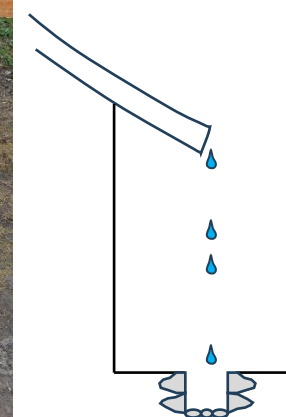


図5 雨落ち溝の模式図

雨落ち溝は、屋根から落ちる雨水を受けるための溝です。
屋根の先端の真下に沿って設置されるため、この溝の輪郭が明らかになることで、屋根の先端の位置を知る手掛かりになります。



図6 大手門脇櫓背面（仙台市博物館蔵）
（昭和8年以降、南西から撮影された写真）

写真右石碑：「満州事変戦没軍馬之碑」（昭和8年設立）

○「満州事変戦没軍馬之碑」

- 昭和8年に建立された石碑。
- 今回の調査ではその周縁の縁石状の部分の基礎が確認されました。
- 戦後に長沼の北側に移設されています。



図7 現在の「満州事変戦没軍馬之碑」

4 大手門背面の水路（堀）跡の調査（2区）

- ・大手門の南西側には、「中島池」がひろがっており、そこから北側に向かう水路（堀）があったことが絵図等からわかっています。
- ・今回の調査では、その水路（堀）跡の一部が検出されました。
- ・確認された水路（堀）跡の規模は幅約 15m、深さは 1.8m 以上あり、底面は確認できていません。
- ・戦後の米軍キャンプ設営時に埋め立てられたと考えられ、現在の表土の直下まで埋め立ての土が及んでいます。



図 8 第 3 次 2 区：水路（堀）跡検出状況全景（南東から）



図 9 水路（堀）跡の検出状況
西側の立ち上がり（南東から）



図 10 水路（堀）跡の検出状況
東側の立ち上がり（南西から）

5 絵図で見る大手門周辺の様子

- ・中島池から延びる水路（堀）の姿は、江戸時代の絵図にも描かれています。仙台城と城下町を描いた現存最古の絵図である『奥州仙台城絵図』（正保 2 年（1645））に描かれている水路には、「水落堀 幅六間 深二間半」との記載があり（図 12：黄枠内）、堀の規模は 1 間 6 尺とすると幅約 18.18m、深さ約 4.55m となります。
- ・この水路（堀）については、昭和の測量図や写真でも存在を確認できることから、大手門焼失時まで存続しており、大手門焼失後、二の丸一帯が米軍キャンプとなった際に埋め立てられたと考えられます。
- ・今回の調査で検出された水路（堀）跡は、この「水落堀」と同一のものと考えられます。この「水落堀」が、自然環境を利用した城郭の水利システムにおいてどのような役割を果たしていたのか、今後さらに検討していく必要があります。

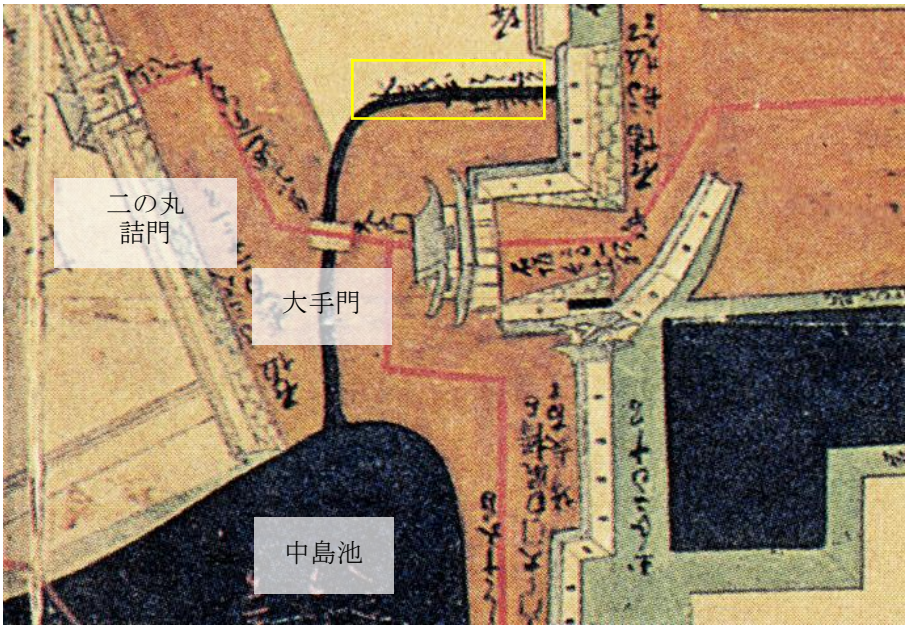


図 12 『奥州仙台城絵図』（正保 2 年（1645））（仙台市博物館蔵）

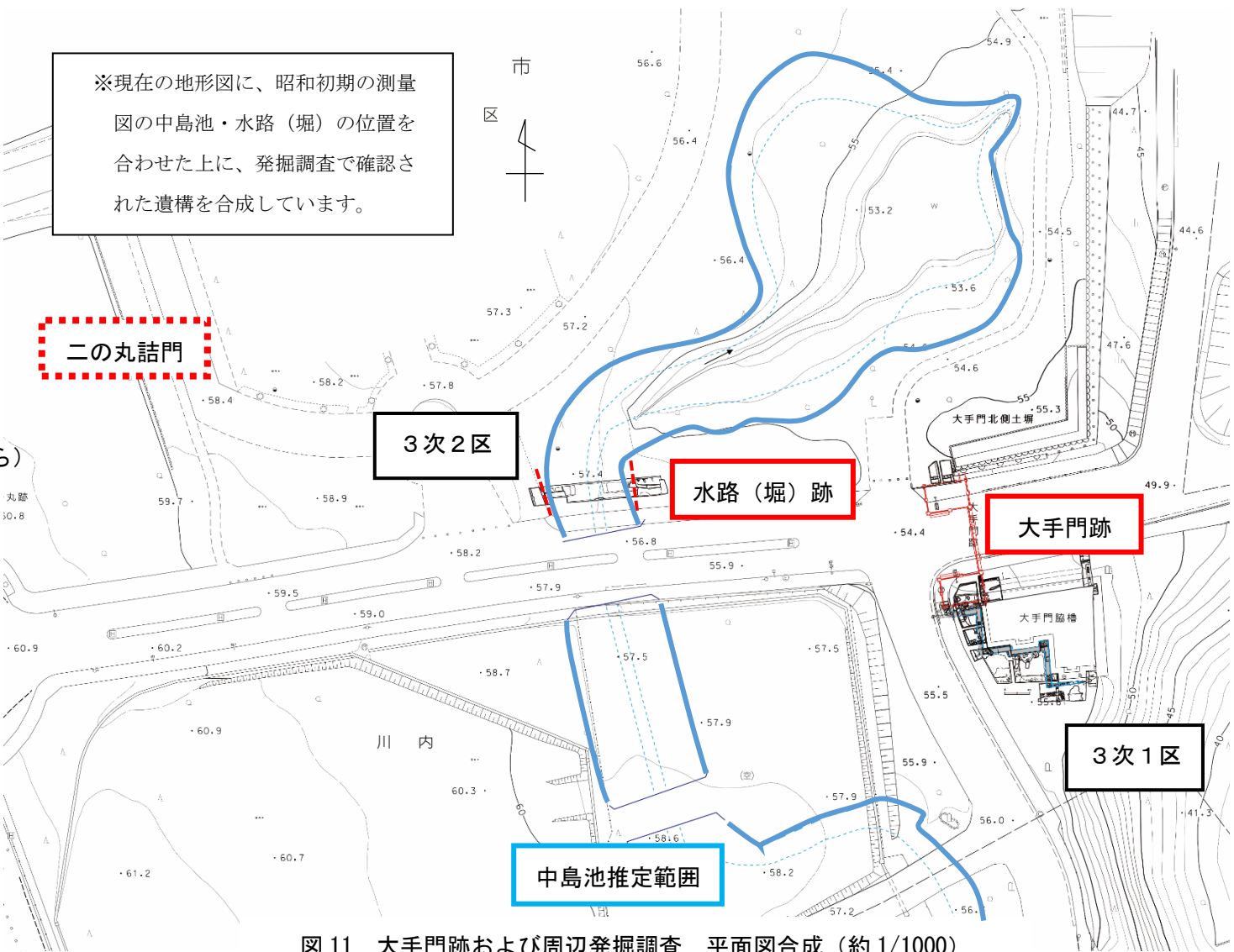


図 11 大手門跡および周辺発掘調査 平面図合成（約 1/1000）

大手門復元に向けて

本市では、伊達政宗公没後 400 年にあたる令和 18 年までの仙台城大手門復元を目指し、「仙台城大手門復元基本構想」の策定を進めています。

基本構想の中間案について、11 月 25 日よりパブリックコメントを実施します。詳細は文化財課 HP や X などでお知らせします。



文化財課 HP



文化財課 X